

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 7 年度病害虫発生予報第 6 号について

平成 2 7 年度病害虫発生予報第 6 号を発表したので送付します。

平成 2 7 年度病害虫発生予報第 6 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
普通期水稲	1 穂いもち ※※	やや多	2
大豆及び野菜・花 き類	1 ハスモンヨトウ等のチョウ目(鱗 翅目)害虫 ※	やや多	2
施設野菜全般	1 土壌病害虫	—	3
トマト	1 トマト黄化葉巻病(TYLCV)	—	3
ウリ類	1 黄化えそ病(MYSV) 2 キュウリ・メロン退緑黄化病(CCYV)	— —	4 4
促成いちご	1 炭疽病、萎黄病 2 その他の病害虫	— —	4 4
果樹全般	1 果樹カメムシ類	—	4
カンキツ類 (露地栽培)	1 黒点病 2 ミカンハダニ	やや多 並	5 5
茶	1 炭疽病 2 チャノコカクモンハマキ 3 チャハマキ 4 チャノホソガ 5 カンザワハダニ 6 チャノミドリヒメヨコバイ 7 チャノキイロアザミウマ 8 クワシロカイガラムシ 9 チャトゲコナジラミ	やや少 並 並 並 やや少 並 並 並 —	6 6 6 7 8 8 8 8 8

※※は注意報を発表。 ※は防除情報を発表

○ 作物の生育状況(9月中旬)

極早生うんしゅうみかんは収穫期、その他のカンキツ類は果実肥大期、茶は秋芽生育期であった。

○ 向こう1か月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	40	30	30
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(1か月予報 鹿児島地方気象台9月24日発表)

○ 発生予報の根拠および防除対策

普通期水稻

1 いもち病 (やや多)

※※ 平成27年度病害虫発生予察注意報第3号(8月3日発表)参照

(1) 9月中旬の巡回調査結果

発生面積率: 57.5% (平年 45.0%、前年 47.5%) 平年よりやや多

発病穂率: 0.6% (平年 1.2%、前年 0.8%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 常発地等で葉いもちの発生が多いほ場では、穂揃期に液剤または粉剤で防除する。

大豆及び野菜・花き類

1 ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫 (やや多)

※ 平成27年度病害虫防除情報第8号(10月上旬発表予定)参照

[予報の根拠]

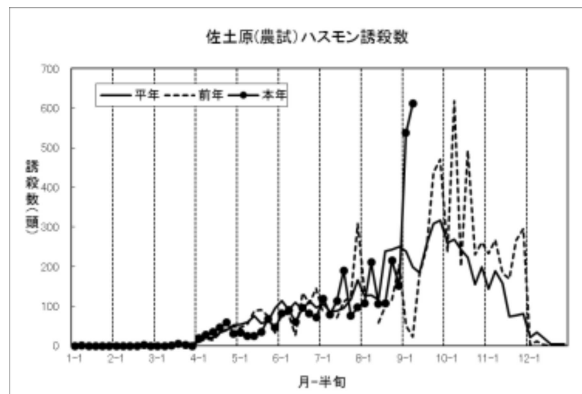
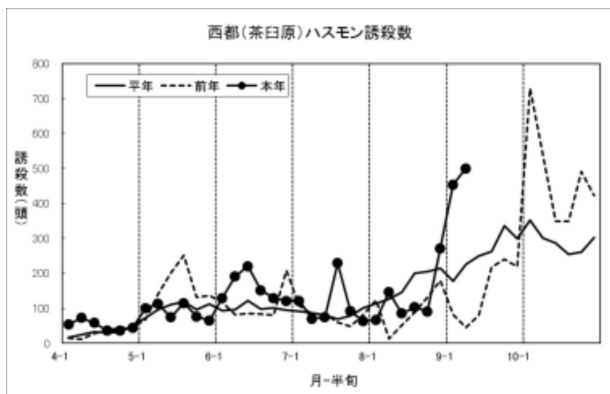
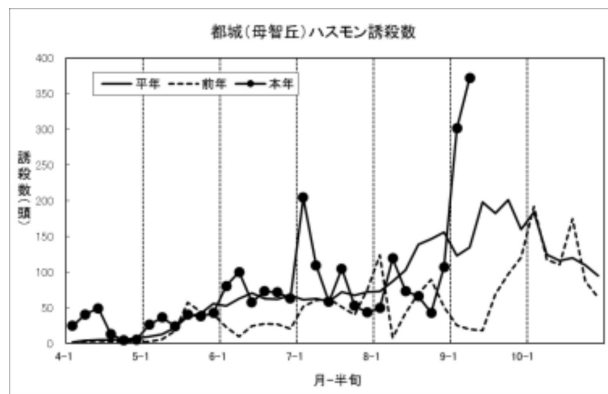
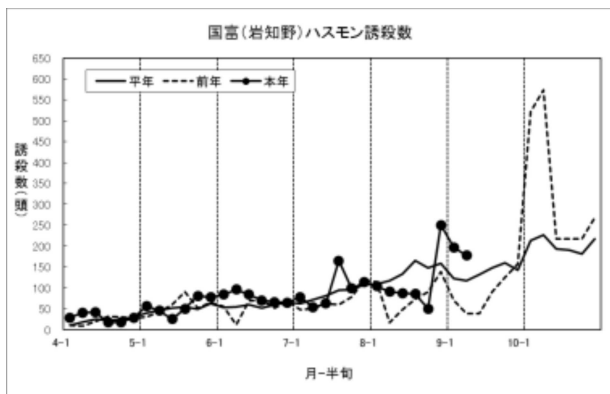
(1) 9月中旬のサツマイモほ場でのハスモンヨトウ等の発生面積率83.3%(平年87.0%、前年100.0%)、被害葉率31.8%(平年46.8%、前年55.9%)はいずれも平年よりやや少である。

(2) 9月中旬の大豆ほ場でのハスモンヨトウ等の発生面積率90.0%(平年86.2%、前年100.0%)は平年よりやや少、食害度11.7(平年17.0、前年20.3)は平年並である。

(3) 国富町、都城市、西都市、宮崎市佐土原町に設置したフェロモントラップ調査による誘殺数は、いずれの地点も平年より多く推移している。

[防除上の注意]

(1) 幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除する。



ハスモンヨトウのフェロモントラップ誘殺状況

施設野菜全般

1 土壌病害虫

[防除上の注意]

- (1) 台風等による大雨では場が冠水した場合は、土壌消毒の効果がなくなり、疫病や青枯病、線虫等の被害が発生する恐れがあるので、排水対策を十分行うとともに、必要に応じて再度土壌消毒を行う。
- (2) 薬剤による土壌消毒を行う場合は、事前の耕起、整地は丁寧に行い、土壌水分の調整を適切に行う。
- (3) 苗等の生育状況をこまめに観察し、疫病等の発病が疑われる場合は、早めに防除を行う。

トマト

1 トマト黄化葉巻病(TYLCV)

[防除上の注意]

- (1) 病原ウイルスは、タバココナジラミ類（ハイオタイプB（シルバーリーフコナジラミ）、ハイオタイプQ）によって伝搬されるので、媒介虫の施設内への飛び込みを防止し、増殖しないよう防除を行う。また発病株は見つけ次第抜根し、ほ場から持ち出し埋没処分する。
- (2) 生育初期に感染すると被害が激しく、全滅する場合もあるので、媒介虫の施設への侵入を防ぐため、育苗・栽培施設の開口部には、目合い0.4mm以下の防虫ネットを設置するとともに、育苗期間中の防除を徹底する。
- (3) タバココナジラミ類は、一旦密度が増加すると防除が難しいので、定植時に粒剤処理を行うとともに発生初期の防除を徹底する。また、黄色粘着トラップを設置し、

早期発見・密度抑制に努める。

- (4) 特に、タバココナジラミ バイオタイプ Q は、各種薬剤に対する感受性が低く防除効果が劣る場合があるので、適切な薬剤の選択が必要である。
- (5) タバココナジラミ類は多くの植物に寄生し、増殖するので、育苗・栽培施設内外の除草を徹底するとともに栽培目的以外の作物や観葉植物等を持ち込まない。

ウリ類

1 黄化えそ病(MYSV)

[防除上の注意]

- (1) 一部地域の露地きゅうりで確認され、徐々に拡大傾向にあることから、今後は、現在未発生地域でも発生が懸念される。
- (2) 近紫外線カットフィルムや施設開口部に防虫ネット(0.4mm目合い以下)を必ず設置するとともに、施設周囲に光反射マルチ(少なくとも70cm幅以上)を被覆する等の物理的防除手段を利用し、施設内へのウイルス媒介虫の侵入を抑制する。
- (3) 本病を媒介するミナミキイロアザミウマは各種薬剤に対する感受性低下が確認されており、薬剤のみに依存すると防除が困難になる。そのため、本虫が土中や地表面で蛹化することを防止するためのマルチ被覆や誘殺のための有色粘着板の設置、生物農薬の使用等、総合的な防除対策を講じる。
- (4) ミナミキイロアザミウマは多くの植物に寄生し、増殖するので、育苗・栽培施設内外の除草を徹底するとともに栽培目的以外の作物や観葉植物等を持ち込まない。

2 キュウリ・メロン退緑黄化病(CCYV)

[防除上の注意]

- (1) 病原ウイルスは、タバココナジラミ類(バイオタイプ B(シルバーリーフコナジラミ)、バイオタイプ Q)によって伝搬されるので、媒介虫の施設内への飛び込みを防止し、増殖しないよう防除を行う。
- (2) きゅうりでは、特に摘心栽培で影響が出やすく、発生の程度によっては収量の減少につながる。メロンでは、感染した場合、着果とともに症状が激しくなり品質・収量が低下する。
- (3) きゅうり、メロンともに育苗期からの感染防止に努め、特にメロンでは開花結実期までの防除を徹底する。
- (4) 草勢の低下により症状が進行するため、葉面散布等の実施により草勢の維持管理に努める。
- (5) 防除対策については、トマト黄化葉巻病の項を参照する。

促成いちご

1 炭疽病、萎黄病

[防除上の注意]

- (1) 罹病苗の持ち込みは本ぼ内での感染源となるため、健全苗の定植に努める。苗床で発病した苗については、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分する。(発病苗及び半径3ポット程度は廃棄する。圃場周囲に放置しない。)
- (2) 定植後に発病した株は早期に除去し、ビニール袋に入れて隔離するなど病原菌の拡大防止に努める。

2 その他の病虫害

[防除上の注意]

- (1) 近年、苗からの持ち込みによるうどんこ病やハダニ類の発生が多く、定植初期から病虫害の発生が多い状況が見られるので、定植前に防除を徹底し、本ぼに病虫害

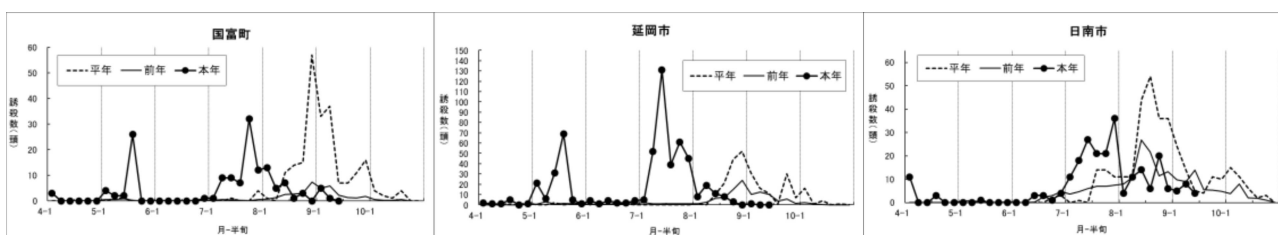
を持ち込まないように注意する。

果樹全般

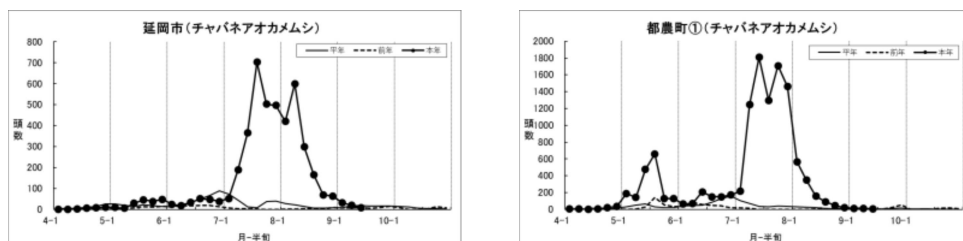
1 果樹カメムシ類

[防除上の注意]

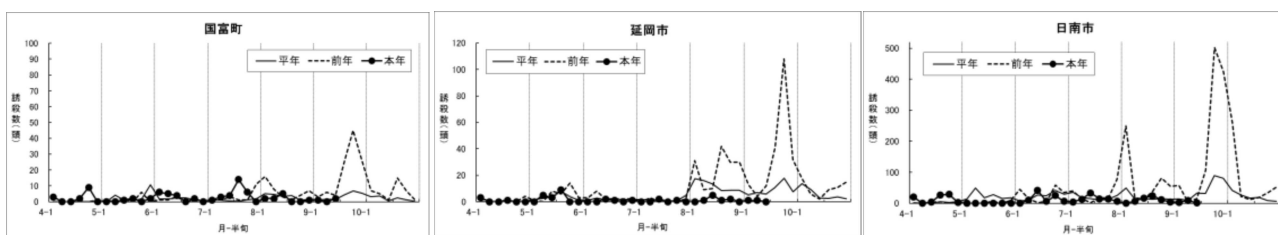
- (1) フェロモントラップ・予察灯調査では7～8月にかけてチャバネアオカメムシの誘殺数が増加したものの、その後は少なくなっている。
ツヤアオカメムシの誘殺数は少なく推移している。
- (2) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努める。
- (3) うんしゅうみかんでは、色ぬけから着色始め頃の加害は落果を生じやすく、特に注意が必要である。



チャバネアオカメムシの予察灯誘殺状況



チャバネアオカメムシのフェロモントラップ誘殺状況



ツヤアオカメムシの予察灯誘殺状況

カンキツ類(露地栽培)

1 黒点病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の巡回調査結果
 発生面積率：70.6% (平年 61.6%、前年 66.6%) 平年よりやや多
 発病果率：42.4% (平年 23.8%、前年 44.8%) 平年よりやや多

[防除上の注意]

- (1) 感染源となる枯れ枝は、可能な限り取り除き園外に持ち出して処分する。
- (2) 防除間隔の目安は積算降水量250mmで、降水量が少なくても1か月後には次の防除が必要である。

2 ミカンハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の巡回調査結果

発生面積率：53.0% (平年 44.8%、前年 55.6%) 平年よりやや多

寄生葉率：7.7% (平年 8.3%、前年 9.6%) 平年並

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除効果が劣るので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5~1頭を目安に、発生初期に防除を行う。
- (2) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を実施する。

茶

1 炭疽病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の巡回調査結果

発生面積率：35.3% (平年 55.9%、前年 53.0%) 平年よりやや少

m²当たり病葉数：1.6葉 (平年 8.0葉、前年 8.2葉) 平年よりやや少

2 チャノココクモンハマキ (並)

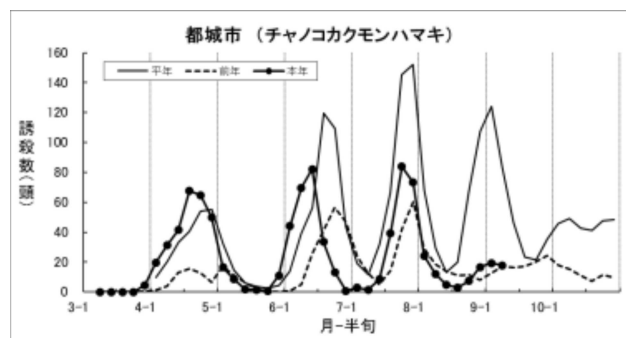
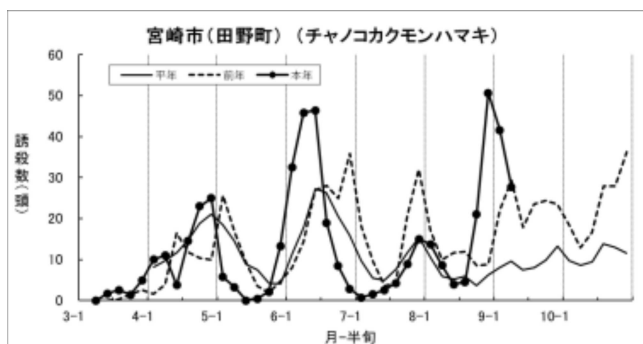
[予報の根拠]

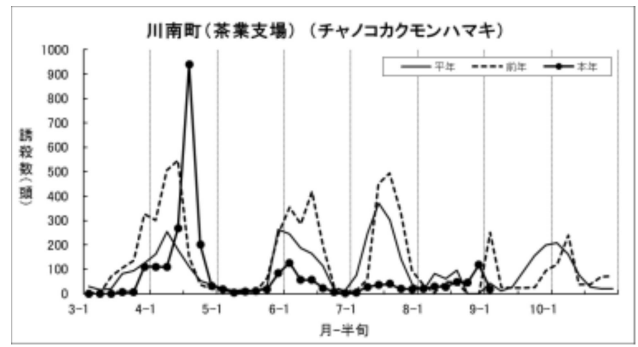
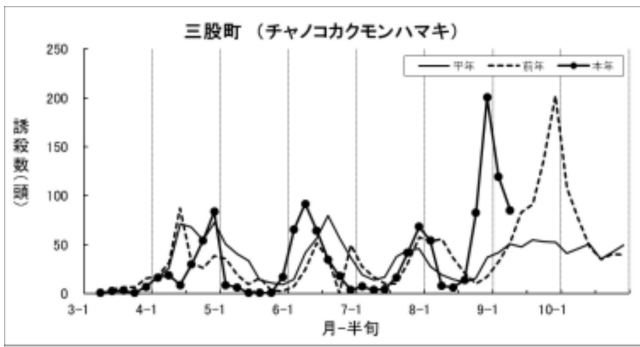
- (1) 9月中旬の巡回調査結果

発生面積率：0.0% (平年 1.2%、前年 0.0%) 平年並

m²当たり虫数：0.0頭 (平年 0.0頭、前年 0.0頭) 平年並

- (2) 宮崎市田野町、都城市、三股町、川南町(茶業支場)に設置しているフェロモントラップ調査による誘殺数は平年並~やや多い状況である。





3 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

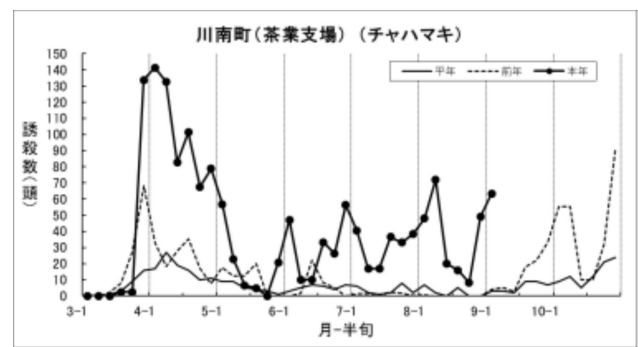
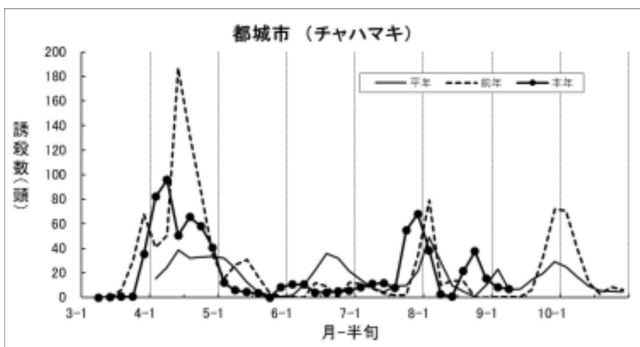
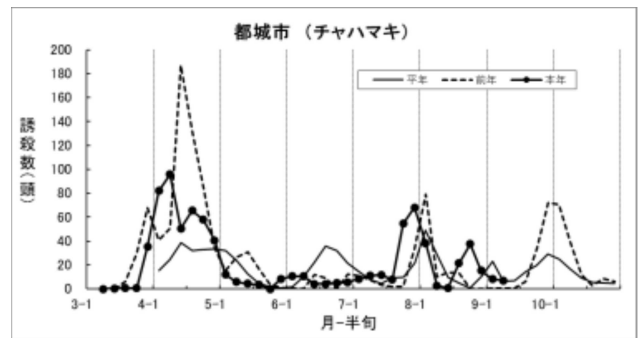
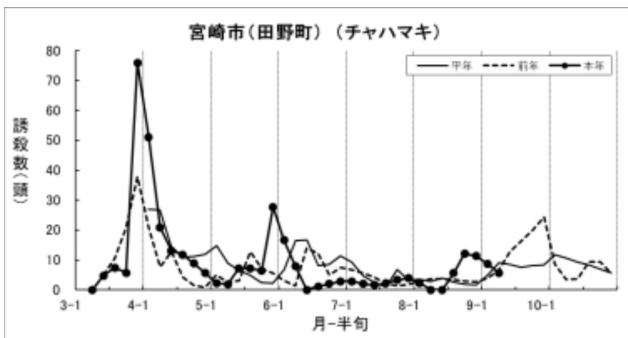
(1) 9月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 0.0% (平年 1.2%、前年 0.0%) 平年並
 m²当たり虫数 : 0.0頭 (平年 0.0頭、前年 0.0頭) 平年並

(2) フェロモントラップ調査による誘殺数は川南町(茶業支場)ではやや多いもののその他は平年並の状況である。

[防除上の注意]

- (1) 発生状況は地域により差があるので、ほ場での発生状況を確認する。
- (2) 防除適期は、発蛾最盛日から7～10日の若齢幼虫期である。
- (3) 地域によっては、秋期に被害発生が見られることがあるので注意する。



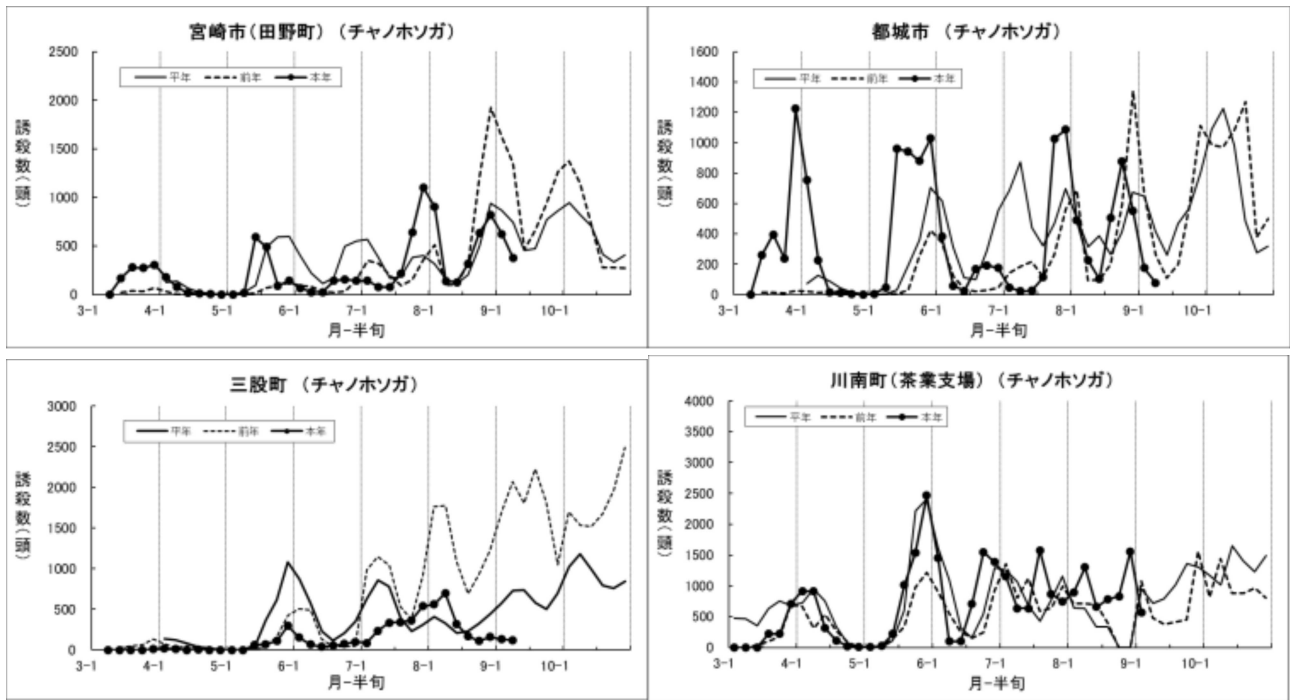
4 チャノホソガ (並)

[予報の根拠]

(1) 9月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 47.1% (平年 46.5%、前年 88.2%) 平年並
 m²当たり巻葉数 : 6.1葉 (平年 6.4葉、前年 12.1葉) 平年並

(2) フェロモントラップ調査での前回の発蛾最盛期は8月下旬～9月上旬であり、誘数は平年並～多の状況である。



5 カンザワハダニ (やや少)

[予報の根拠]

(1) 9月中旬の巡回調査結果

発生面積率：11.8% (平年 36.5%、前年 47.1%) 平年より少

寄生葉率：0.4% (平年 2.9%、前年 2.8%) 平年より少

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は越冬前の10月中下旬であるが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断する。
- (2) 温度が高い時期のマシン油乳剤の使用は、赤焼病の発生を助長させるので、気温の安定した11月中旬～12月下旬に行う。
- (3) 本県では、冬期においてもダニの繁殖が見られるため越冬前の防除がより重要であり、この時期の防除が十分でないと翌年の一番茶への影響が大きい。
- (4) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を実施する。

6 チャノミドリヒメヨコバイ (並)

[予報の根拠]

(1) 9月中旬の巡回調査結果

発生面積率：47.1% (平年 51.2%、前年 47.1%) 平年並

寄生葉率：2.0% (平年 3.6%、前年 2.8%) 平年よりやや少

[防除上の注意]

- (1) 秋整枝を行う成木園では特別に防除をする必要性は低いですが、更新園や幼木園では新芽の生育期間が長く、被害を受けやすいので、芽の状況に合わせて防除する。

7 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

(1) 9月中旬の巡回調査結果

発生面積率：47.1% (平年 47.6%、前年 47.1%) 平年並

寄生葉率：3.6% (平年 5.3%、前年 7.1%) 平年並

(2) 9月中旬の払い落とし調査による発生面積率47.1% (平年54.1%、前年47.1%)

は平年並、払落虫数4.0頭（平年7.1頭、前年4.8頭）は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 秋整枝を行う成木園では特別に防除をする必要性は低い、更新園や幼木園では新芽の生育期間が長く、被害を受けやすいので、芽の状況に合わせて防除する。

8 クワシロカイガラムシ（並）

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の巡回調査結果

発生面積率：11.8%（平年 18.9%、前年 5.9%）平年並

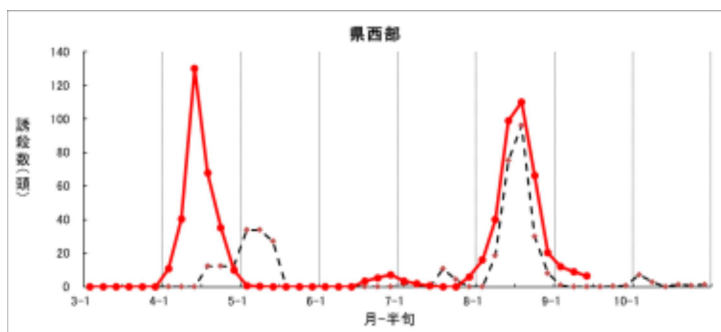
寄生株率：1.8%（平年 6.2%、前年 2.9%）平年よりやや少

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は幼虫ふ化最盛期なので、園内のふ化状況をよく観察して防除する。
(2) 県南部では、第4世代の発生する地域があるが、気温の高い傾向が続いているため、平年発生のない地域でも第4世代の発生が懸念されるので今後の発生状況に注意する。
(3) 薬剤散布量は、成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるように丁寧に散布する。

9 チャトゲコナジラミ

- (1) 県西部における黄色粘着トラップ調査では、8月4半旬に成虫の発生ピークを迎えた。
(2) 防除適期は成虫の発生がおさまり若齢幼虫が発生する時期で、県西部では8月下旬～9月上旬頃であった。



○ その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

宮崎県農薬安全使用啓発

<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>

日本植物防疫協会

<http://jppn.ne.jp>

農林水産省(農薬コーナー)

<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センター

<http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

- 3 発生量(程度)の区分

多い	(高い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	(やや高い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	(低い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均)

- 4 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
(2) 注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
(3) 警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
(4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相

が特異な時に発表する。

(5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 倉富
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127
E-mail: byogaichu-hiryo
@pref.miyazaki.lg.jp